

寺社縁起と霊地ネットワーク

— 厳島神のイメージ構造をめぐって —

ジェシー・ドライアン*

1. はじめに

本稿は厳島神社に関わる寺社縁起及び寺社文書を通して、平家滅亡以後の厳島神のイメージ、寺社縁起によって繋がっている霊地、すなわち霊地ネットワーク、の意義を考えようとしたものである。

厳島神社は平清盛の後援により有力な霊場になったことが知られているが、その後、なぜ存続できたのか。厳島の神が平氏の氏神でしかなかったら、平氏の敗北以降、軽視されるはずだが、実際にはそうではなかった。むしろ、十三世紀から十六世紀までの縁起や寺社文書を見ると、厳島の神に言及している中央寺社の縁起説や言説は少なくない。この点は田中貴子氏によって指摘されているが¹、厳島の神がなぜ取り入れられたかはまだ明確ではない。従って、それを明らかにするために、蒙古襲来以後における縁起形成活動と厳島との関わりから一つの解釈を試みたいと思う。結論から言えば、厳島の神は、敵国降伏のための強力な神だと認識されて、軍事的な力や九州との地理的なつながりを主張したい様々な中央の寺社の神仏と、結び付けられるようになったと考えられるのである。

2. 先行研究と本稿の立場

寺社縁起とは、一つの寺社の起源や由来を語り、

寺社の自己表現の手段であると一般に考えられている。しかし、近年、寺社資料の調査の高まりから、称名寺、真福寺などの寺院による寺社縁起の集積・伝承活動、僧侶と寺院のネットワークに関する研究が発展しつつあり、寺社縁起研究の対象範囲が拡大されることになった²。特に、縁起と聖地の空間構造に関わる研究が進んでいる。藤巻和宏氏は縁起の分析により地下に埋まる宝珠や舍利に関わる言説や信仰が「地上を聖地化する」と示している³。また、中世の寺社縁起が異なる縁起説や言説を取り入れ、他の寺社と繋がっている「寺社圏」という空間を規定したことが、大橋直義氏によって主張されている⁴。要するに、聖地の空間、あるいは空間の聖性、が縁起に含まれている信仰・言説などによって認識されたということだ。そう考えれば、縁起が他の寺社との繋がりを提供することが聖地の空間のみならず本尊や祭神のイメージも創出、再構成することができると考えられる。

聖地と祀られている神々は緊密な関係があることは言うまでもない。絵巻や宮曼荼羅が神の姿を直接描かず、社頭の風景として表現することがまれではない⁵。つまり、聖地と神が同一視されるわけである。だが、寺社縁起の中の神々に焦点を当てる研究はまだ比較的少ない。聖地や社頭とは異なり、神々は他の神と交流すること、他の地域に移転することができる。それゆえ、神の描写は聖地のイメージを描写するためや、霊地ネットワークを構築するための重要な要素だと言える。

蒙古襲来後、神々のイメージや神々の繋がりが

*南カリフォルニア大学大学院生

非常に重要だった。対外的危機感が高まり、神仏の異国退治に対する霊力が要求されるようになった。恵尋という比叡山の僧が「鎮護国家之計」^{コト}、降伏異国之基^キ」と言った通り、寺社の外敵防御能力が政治的な重要性が注目されるようになった⁶。異国降伏の祈祷の効験を示すために、諸寺社が積極的に異国降伏にまつわる霊験を縁起などに結びつけたとされている⁷。海津一朗氏によって指摘された恩賞要求の訴訟文書を見ると「異国降伏の霊験、他に異なる」「蒙古蜂起祈祷の最中」などのような表現が多く含まれているので、多数の異国降伏祈祷を行った寺社から区別し、自社の神の祈祷の優位性を示す必要があったことは確かだ⁸。しかし、縁起の集積活動によって自社の縁起説、訴訟文書等のために、他の寺社の縁起説、祭神のイメージが利用できるようになったため、自社の縁起を自律的に再編、生成することができたかどうか、疑うこともできる。

3. 平家滅亡以後の厳島神社

平氏の敗北のため、厳島神社が衰退の危機にさらされる可能性はあったと考えられるが、鎌倉幕府は厳島を処罰するのではなく、むしろ厳島の神からの保護を願った。つまり、厳島の神としての力は平氏の影響力に依存していなかったということである。文治五年（1189年）、壇ノ浦の戦いの4年後、鎌倉幕府は奥州合戦の間に源頼朝が厳島の神の庇護を受けられるように祈祷と神楽を命じた⁹。これは、平家に対する勝利を示すという目的で行われたと松岡久人氏によって解釈されている¹⁰。しかし、このような理由であれば、源平合戦の終局後直ちに祈祷を要請すべきなのではないだろうか。鎌倉幕府の政治的、権力的な意図があったかもしれないが、厳島の霊力の要因を考察しなければならない。

厳島の神は平氏の氏神だけでなく、海の神（水神・龍神）にも軍の神にも認識されたので、イ

メージを新たにせず、ただ軍神という面を強調する必要しかなかった。厳島の神を軍神として記述する最も古い文章は平安後期に集成された『梁塵秘抄』である。『梁塵秘抄』の中で東の方にある軍神を歌ってから、次のように軍神を表現している。「関より西なる軍神 一品山 安芸なる厳島 備中なる吉備津宮 播磨に広峯惣三所 淡路の岩屋には住吉西の宮」という¹¹。そうした信仰がいつから始まったかは不明だが、平氏の時代には既に存在していたことは分かる。その上、時代の変遷にもかかわらず、有力な軍神というイメージが維持された。ただ、蒙古襲来以後になると、有力な軍神とは異国を降伏する神になってきた。霊地ネットワークの観点から見れば、平氏の敗北が忘れられたということより、当時の情勢に適合するイメージが強調されたことが理解できる。厳島より、神宮皇后説話や、蒙古襲来の中心にした九州の寺社の方が、異国降伏の関連性が高かったので、厳島を九州にある神社、神功皇后の説話と結びつける叙述によって厳島のイメージが向上したと想定できる。

厳島神社は、永仁六年（1298年）造進の支援を受けるために鎌倉幕府に訴えたと推測されている¹²。宝蔵から取り出された文書のリストしか残っていないが、そのリストの内容を、当時の恩賞申請の申状と比較すれば、内容がほぼ同じだと分かる。平安時代に行われた一切経の記録、鎌倉幕府からの寄進状、異国降伏祈祷の御教書などが含まれているので、厳島の神は鎮護国家、將軍家、異国降伏のために効験の神であると表現している。

だが、多くの寺社が異国降伏祈祷を行ったので鎌倉幕府の異国降伏祈祷指令を受けたことを示すだけで、寺社の優勢を発揮することができたというわけではない。なので、異国降伏祈祷に対する恩賞、堂塔の修理などを朝廷や幕府に請求する時、祈祷を行った記録だけでなく、縁起説、霊験譚も利用している申状を提出した寺社があった。建武三年（1336年）の長門国一宮住吉社からの文書は

請求に添えた文書の題目の後、住吉大明神を「異国征伐之武将、本朝鎮護之靈神也」と定義しており、神功皇后の三韓征伐との関係を強調している¹³。仲哀天皇を祀る長門国住吉社は神功皇后と強い関係を持ったので、鎮護国家の優れた性格を示すことが困難ではなかったのではないか。一方で、異国征伐と直接関係のない厳島神はどのように自分の異敵を追い散らす靈力を示すことができたのだろうか。

4. 厳島縁起説と靈地ネットワーク

現存する最古の厳島縁起は金沢文庫蔵『厳島大明神日記 竈門 白山 一体／御事』（以下『厳島大明神縁起』）である。写本が二つ残っている。一つは称名寺第二長老の鋸阿によって、一つは極楽寺の全海によって書写された。両本は鎌倉後期に鎌倉周辺の寺院で書写された。牧野和夫氏は『厳島大明神日記』と鋸阿・全海が書写した神道書類との比較で、『厳島大明神日記』が西大寺流律や戒壇院系律の連関によって作成されたと提案している¹⁴。言い換えると『厳島大明神日記』は恐らく厳島神社の社家のみによって作成されたものではなく、広い人的・伝承ネットワークを使う西大寺流律や戒壇院系律の僧侶の動きの影響を受けたわけだ。厳島の一般的な縁起譚を語ることは勿論だが、それより副題が示す竈門山・白山との一体の関係が意義深いと考えられる。竈門山と白山の意味は最初の文に暗示されている。「彼大明神者旅神マシマス。仏法興行ノ主シ慈悲第一ノ神明也。尺迦羅龍ノ次ノ娘八歳ノ龍女ニハ妹神功皇后淀姫ニハ姉也。」¹⁵と厳島の神を描写している。北九州の宝満山に位置する竈門神社と重なり、厳島の神と神功皇后とのつながりが強まる。龍神を祀る白山と重なり、厳島と龍王の娘とのつながりが強まる。このように、厳島のイメージは由来説より神々と結ぶ靈地ネットワークによって構造されたといえよう。神々に対する言及の利用で靈地

ネットワーク・神のイメージを表すことがあれば、他の寺社縁起も厳島と結びつけ、厳島の神のイメージに影響を与えることができると考えられる。蒙古襲来後、厳島の神を含む靈地ネットワークが八幡縁起・聖徳太子説話・訴訟文書などにも見られる。本稿ではこういう資料を分析する余裕はないが、指摘したいのは、厳島の神のイメージにおいては、こういう資料には縁起説や言説の内容が一致するという点である。厳島の神に関わる縁起説や言説を手に入れば、厳島と結びつけることができるという言説的な構成のやり方が見られる。

例えば、『八幡愚童訓』と永仁元年（1293年）の他宝坊願文が厳島の神を含め軍神を列挙する。『八幡愚童訓』は次のように厳島の神を神功皇后の説話に織り込めている。「諏訪・熱田・三島・宗像・厳島大明神達、都合三百七十五人、志賀ノ島ヨリ四十八艘ノ御船ニ乗給……此内梶取ニハ志賀大明神、大將軍ニハ住吉大明神、副將軍ニハ高良大明神也。」という¹⁶。同じく、他宝坊願文は「すハ（諏訪）大明神・かしま（鹿島）の大明神・ミしまの大明神・あき（安芸）のいつくしま（厳島）の大明神・出雲の御やしろ・はこざき（箱崎）八まん・すみよし（住吉）大明神・かわかみよどひめ（河上淀姫）・かわら（高良）大ぼさつ・八だりうわう（龍王）・うミのいりわう（海龍王）、この神もろともにたこく（他国）のてうふく（調伏）をかへすべし」と熊野権現の託宣として蒙古からの呪いを妨げた軍神をあげている¹⁷。厳島の神だけでなく、諏訪大明神・三島大明神・住吉大明神・高良大明神も両資料に見られる。従って、縁起言説などによって、厳島などの神々が代表的な軍神として固定化されていたと解釈することが可能である。

5. 寺社縁起と集積活動

寺社縁起が文書として扱われたので、縁起の正当性を立証するために、別の縁起で共通の内容を

指摘することに納得がいくのではないかと考えられる。川添昭二氏は、『八幡愚童訓』甲本は異国降伏祈祷の軍忠状であった」と指摘している¹⁸。そう考えれば、蒙古襲来に参加した神々の縁起が証拠になるので、縁起・言説の集積活動によって縁起の正確性を確認し、納得性を高めることができるのである。

もう一つの例をあげると『寺徳集』という園城寺に関する縁起・霊験説を集める書がある。『寺徳集』は次のように巖島と新羅の神のつながりを述べている。「安芸国巖島明神詔宣云。我是娑竭羅龍王女子也。姉是法花提婆品之時即身成仏畢。又有男子。為護智證大師弘法来給。三井寺新羅明神是也云々」¹⁹と『巖島大明神日記』と同じように娑竭羅龍王との血縁関係を用い、新羅明神を巖島大明神と結びつけている。『竈門山宝満大菩薩記』という例にも『法華経』にある八歳龍女の姉妹が列挙されているが、あげられている神々が異なる。この龍女の姉妹という言説は龍女を核として、本来つながりを持たない水神や龍神を結びつぐために利用されたことが田中貴子氏によって指摘されているが²⁰、この言説を含むテキストの多くは八幡神や神功皇后説話に関わるものである。従って、この言説の利用は八幡信仰や神功皇后をめぐる言説の伝播のネットワークによる可能性が高い。

『巖島大明神日記』と同じ称名寺の釧阿の手沢本である『竈門山宝満大菩薩記』は鎮西の神々との関係を述べ、神功皇后、八幡菩薩、娑伽羅龍王とのつながりで竈門の神を説明している。その上、神々と結ぶ言説は一つではなく、「八幡大菩薩御託宣」・「三韓征伐記」・「公家転法輪御修法諸神勧請」という三つの八幡信仰に関する資料を引例し、多数の関係言説をあげている²¹。それは正当性を示すためだと読み取れる。

もう一つ注目したいことは、関係付けている神々の中、ほとんど全てが九州に位置するという点である。例えば、『竈門山宝満大菩薩記』はま

ず、娑伽羅龍王の娘の名前と位置する国を列挙している。その娘達とは、八歳の龍女（国は書かれていない）・宝満大菩薩、すなわち竈門大明神（筑前国）・聖母大菩薩（筑前国）・河上大明神（肥前国）・高知尾大明神（日向国）という女神だ。しかも、この女神五人は『八幡宇佐宮御託宣集』にも同様な記述があることを、森弘子が指摘している²²。異国降伏は九州の寺社の特徴になったほど、九州の有力な寺社の多くが神功皇后の三韓征伐の説話、八幡信仰と強い関係がある。だが、異国降伏祈禱を行った、恩賞を要求した寺社は九州に限らなかったため、中央の寺社が九州を中心とした合戦や九州にある寺社との距離を縮めようと霊地ネットワークを結んだと考えられる。九州から離れば離れるほど、蒙古合戦に参加することが難しくなった。神々の場合でも同じだ。そして、中央の寺社が九州の寺社と結びつけるために、霊地ネットワークになったと解釈できる。従って、九州にある寺社の特別性を保つために、九州に限られた霊地ネットワークが生成されたのではないかと『竈門山宝満大菩薩記』の結んでいる神々から考察できる。

そうであれば、『巖島大明神日記』にある巖島と竈門山とのつながりは、そのような九州寺社の霊地ネットワークに取り込まれることを目的としたのではないと考えられる。『巖島大明神日記』にも、『正法輪蔵』という聖徳太子絵伝にも、鎮護国家の役割を果たすために、巖島の神が九州から巖島神社に移動したことが見られる。

『巖島大明神日記』は、「百王ヲ守護シ教法ヲ渡サムハカリ事ニ王城近クト思シテ九州ヨリ寄給」と説明している²³。また、『正法輪蔵』は「為ニ百王ヲ守護ノ離本所ヲ近ク王城」とほぼ同様な表現である²⁴。本所は九州だというのは具体的に表していないが、「遊ビ侍ル時西ノ方ヨリ奉錦ノ帆船」と西の方から来る神の船を描写しているため、九州から巖島に移転したことを暗示していると読み取れる。しかも、『巖島大明神

日記』の文章との類似性を考慮すれば、『正法輪蔵』の編者が同種の巖島縁起譚を受けたと推測できる。

そういう縁起言説が伝播されたと言えども、巖島の縁起説はまだ多様であった。鎌倉後期に編集されたとされている『類聚既験抄』という説話集には、巖島神社に関する説話が二つある²⁵。両方が上記の例と異なり、弘法大師が巖島に詣でるエピソードを中心にする。また、『溪嵐拾葉集』「弁才天部」は弁才天の霊地ネットワークを述べ、各霊地の縁起説を集めるが、巖島の縁起説は驚くほど異なるのだ。統一のある縁起説を説明されず、巖島の神は娑竭羅龍王の第二娘であり、如意宝珠が社殿に埋められており、背後にそびえる弥山は弘法大師に関係のある山岳霊地だと各々情報を載せる。巖島と箕面を除いては、含まれている弁才天の霊地（竹生島・江島・天川・背振山）は縁起説が詳細に書かれている²⁶。なので、『溪嵐拾葉集』の編者たる光宗は『巖島大明神日記』や八幡縁起のような縁起テキストを受けることなく、他の巖島に関する資料を収集したという可能性が高い。

6. まとめ

このように、巖島縁起のテキストを手に入れることがなくても、巖島の縁起譚・言説や巖島神のイメージが分からなかったというわけではない。『巖島大明神日記』と同じように、他の寺社に関する縁起や文書も巖島の神を、戦の神、龍神、神功皇后の妹として、外敵を打ちはらえる有力な神であると描写する。それゆえ、巖島のいうイメージが固定化されるようになったと考えられるのである。とはいえ、巖島のイメージや縁起言説には不一致がなかったというわけではない。人的ネットワーク（人的交流とそれからもたらされた伝承）・霊地ネットワーク（地理的、言説的な構造によって結ばれている寺社地域及び神仏）によって相違が生じたといえよう。八幡宮神・神功皇后

をめぐる霊地ネットワークと結びつくなら、九州に位置する軍神だというイメージが強まるが、一方で八幡信仰や神功皇后説話と離れている光宗は別の霊地ネットワークで巖島のイメージに影響した。その二つの霊地ネットワークが同時代に現れたので、共通の背景によって巖島のイメージが生産されたのかもしれない。まだ上記のような資料の内容や構成背景をもっと深く分析しなければならぬが、少なくとも、巖島の神にまつわる縁起説・神のイメージを多様な寺社の縁起・文書から見れば、諸縁起・言説が相互に有機的な関連を持っており、巖島の神のイメージを構築したと考えられるのである。

註

- 1 田中貴子『外法と愛法の中世』（砂子屋書房、1993年）29-38.
- 2 寺社縁起の集積や伝播活動については、阿部泰郎『中世日本の宗教テキスト体系』（名古屋大学出版会、2013年）、川崎剛志『院政期における大和国の霊山興隆事業と縁起』阿部泰郎編『中世文学と寺院資料・聖教』（竹林舎、2010年）、『牧野和夫『日本中世の説話・書物のネットワーク』（和泉書院、2009年）を参考。寺社のネットワークについては大橋直義『転形期の歴史叙述：縁起巡礼、その空間と物語』（慶應義塾大学出版会、2010年）を参考。僧侶ネットワークについては、ブライアン・小野坂・ルパート「日本中世のネットワーク僧と唱導聖教の伝播」松尾恒一編『東アジアの宗教文化』（岩田書院、2014年）を参考。
- 3 藤巻和宏「聖地の地下には：日本中世の宝珠・舍利信仰の一隅より」藤巻和宏編『聖地と聖人の東西：起源はいかに語られるか』（勉誠出版、2011年）14.
- 4 大橋直義「寺社の空間と言説：「寺社圏」としての南都に及ぶ」（『アジア遊学』174号、2014年）14-16.
- 5 山本陽子『絵巻における神と天皇の表現：見えぬように描く』（中央公論美術出版、2006年）73-75.
- 6 恵尋の著作である『天台菩薩戒真俗一貫抄』（弘安七年（1284年））は叡山文庫真如蔵に所蔵されているが、まだ全文翻刻されていない。引用した文は船田淳一「中世叡山の戒律復興：律層恵尋の思想と国家観をめぐって」（『佛教大学総合研究所紀

- 要』16号、2009年) 362による。
- 7 窪田哲正「『異国之難』と天台僧惠尋：日蓮聖人と比較の視点から（『大崎学報』138号、1985年）67.
 - 8 海津一郎『中世の変革と徳政：神領興行法の研究』（吉川弘文館、1994年）126-127.
 - 9 『新出巖島文書』第22
 - 10 松岡久人『安芸巖島社』（法蔵館、1986年）96-97.
 - 11 新編日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（小学館二、2000年）、250.
 - 12 松井輝昭『巖島文書伝来の研究：中世文書管理史論』（吉川弘文館、2008年）、50.『巖島野坂文書』第1864.
 - 13 「中村令三郎所蔵文書」川添昭二『注解 元寇防塁編年史料：異国警固番役史料の研究』（福岡市教育委員会、1971年）471-472.
 - 14 牧野和夫「長門本『平家物語』と『巖島大明神日記』：長門本『平家物語』生成の一過程を『巖島大明神日記』四辺に探る」麻原美子・犬井善寿編『長門本 平家物語の総合研究』第三卷（勉誠社、2000年）245.
 - 15 『巖島大明神日記』『金沢文庫の中世神道資料』（金沢文庫、1996年）52.
 - 16 桜井徳太郎・萩原龍夫・宮田登編『寺社縁起』（日本思想大系20）（岩波書店、1975年）175.
 - 17 「中村令三郎所蔵文書」川添昭二『注解 元寇防塁編年史料：異国警固番役史料の研究』（福岡市教育委員会、1971年）277.
 - 18 川添昭二『中世九州の政治・文化史』（海鳥社、2003年）66.
 - 19 『寺徳集』『続群書類従』第28巻上（続群書類従完成会、1958年）18.
 - 20 田中貴子『外法と愛法の中世』（砂子屋書房、1993年）29-38.
 - 21 『龍門山宝満大菩薩記』『金沢文庫の中世神道資料』（金沢文庫、1996年）47.
 - 22 森弘子『宝満山の環境歴史学的研究』（岩田書院、2009）63.
 - 23 『巖島大明神日記』『金沢文庫の中世神道資料』（金沢文庫、1996年）52.
 - 24 内田吉哉「聖徳太子伝の発展と寺家の学問：文保本太子伝所載の巖島縁起をめぐる」（『史泉』96号、2002年）25.
 - 25 『類聚既驗抄』国文学研究資料館編『中世唱導資料集』第2巻（臨川書店、2000年）255、258-259.
 - 26 『溪嵐拾葉集』『大正新脩大藏經』続諸宗部第76巻（大正新脩大藏經刊行会、1992年）